近世流派剣術から近代剣道への展開過程
―― 一刀流の研究を中心に

研究代表者　立木幸敏*
共同研究者　朴周鳳*、魚住孝至**、吉田鞆男***、
仙土克博****、長南信之****、宮本光輝****
*国際武道大学、**放送大学、***研究所客員研究員・古流剣術研究会、
****古流剣術研究会

我々の行っているプロジェクト研究の独自性は、江戸時代の武道文化の形成に主導的な役割を果たした新陰流と一刀流剣術を中心に、流派剣術の元来の形の仕様とその思想を明らかにすることを通して、日本武道文化の成立基盤の解明をすることにある。

剣術は江戸中期までは流派の形（勢法・組太刀）を中心に稽古されていたが、18世紀後期から防具を着け竹刀で打ち合う撃剣が急速に広がり、それが基盤となって近代剣道が成立した。今日の武道が、近世武術に基づいて近代的に再編成されたものであるとするならば、武道の文化的淵源を探るには、近世武術の中心であった剣術から剣道への展開過程を研究することが重要である。

本稿では、先行研究で新陰流剣術を中心に確立した古伝書に基づく形の解明する手法を踏まえて、一刀流剣術で17世紀に行われていた小野派一刀流の形（組太刀）の実際を当時の古文献に即して解明する。

我々の先行研究では小野派一刀流の組太刀の表五十本を中心に論じてきた。しかし組太刀「三重」についてはまだ検討しておらず他の先行研究においても見当たらない。先行研究で取り扱ってきた津軽家文書（清野写本）では「剣術組遣方覚書」として表五十本、小太刀、相小太刀、及び三重の組太刀の仕様が記されており、これによりほぼ元禄年間に定型化したと考えられる組太刀の仕様が推定できる。

さらに「日本古来武道芸術集、小舘俊雄編」より明治から昭和初期の仕様をもとに三重の組太刀を復刻、津軽家文書（清野写本）による元禄期の仕様と比較検討をすることにより小野派一刀流における三重の位置づけの解明を試みた。

結果、元禄期では相手の切り懸かる太刀を「車を廻し」、「柔らかく受ける」ことによって上太刀になる技術の「切落」と、その母体となったと考えられる「越身」「しないて」を三重に見ることができた。

つまり新陰流でいうところの燕飛の勢法のような位置付けで、小野派一刀流では切落の母体として「三重」が伝えられてきたのではないか。

また、元禄期と明治から昭和初期の「三重」の仕様には違いを見ることができ、近世武術における剣術から剣道への展開解明の糸口と考えている。

柔道指導者における柔道競技力の主観的指標の国際比較

研究代表者：前川直也（国際武道大学）
共同研究社：廣瀬伸良（順天堂大学）、柏崎克彦（国際武道大学）、石井兼輔（国際武道大学）、越野忠則（国際武道大学）、矢﨑利加（国際武道大学）

Maekawa et al.（2013）の先行研究で日本の柔道指導者（コーチ）が柔道の競技力を評価する際の重要項目について検証し、さらに柔道競技力を評価する項目を９項目に精選し、実際の試合結果順位との相関を検証した結果、0.1％の有意な相関関係が得られ、柔道競技力を評価するための有用性が示唆されたことを報告している。本研究は、日本の柔道コーチの競技力を評価する視点と海外のコーチの視点との差異を明らかにすることを目的とした。

海外の柔道指導者は2014（平成26）年度Ｋ大学に研修団として来学したチームのコーチ21名を対象とした。日本の柔道指導者は、Maekawa et al.（2013）の先行研究のデータを用いた。

有意差が認められた項目は、メンタルの強さ、技のキレ、技の粘り、試合のうまさの４項目が５％水準で、段位、組み手のスタイルの項目が１％水準で、学年（年齢）、在籍大学（練習環境）、得意技、競技年数の４項目が0.1％水準で有意差が認められた。

各項目の平均値を降順に順位づけを行い、日本のコーチと海外のコーチの重要視する順位に差異がみられるかを検証するために、スピアマンの順位相関係数を用いて検証した結果ｒ＝0.85で0.1％の有意な相関が認められた。この結果から、日本のコーチも海外のコーチの重要視する順位については差異がないことが明らかとなった。詳細に分析すると、前述のように有意差の認められる項目はあるものの、競技力を評価する上での優先順位は、日本のコーチも海外のコーチも同一であることが示唆された。

本研究は、調査期間が十分に確保することができなかったため、サンプル数が少なく今後の課題としてあげられる。

【キーワード】 柔道競技力、海外指導者、日本指導者、評価比較

「実践型（軽量型）剣道具が運動機能に及ぼす影響について」

研究代表者：井上哲朗（国際武道大学）
共同研究者：矢﨑利加、櫻井健一、神事努、岩切公治（国際武道大学）
井下佳織（帝京平成大学）

本研究では実践型（軽量型）剣道具装着が運動機能に与える影響を調べることを目的とした。

剣道群においては、すべての測定項目において、無装着、実践型、標準型の順で測定値が悪くなる傾向が見られ、剣道具の重量による影響が見られた。

全身反応時間については、有意差は認められなかった。反復横跳びについては、無装着と標準型において有意差が認められた。立ち幅跳びについては、無装着と標準型、無装着と実践型において有意差が認められた。垂直跳びについては、無装着、実践型、標準型すべての関係において有意差が認められた。

以上の結果から、剣道群において、全身反応時間を除いた測定項目において標準型剣道具の装着が無装着時に比べて運動能力に影響を及ぼしていることが認められた。

漢代の画像石・画像磚に見られる漢代の武術の実態

代表研究者：林　伯原（国際武道大学）
共同研究者：周　佩芳（静岡大学）、野田昭彦（国際交流基金）、
佐藤秀明（株式会社技藝社）、山本計広（株式会社ブレーン・テック）

1）漢代画像石の図案からは漢と匈奴の両軍が命賭けで戦った当時の激戦の様子が明らかに示されている。古文献史料に記されている対匈奴戦争の武術史料の理解上に重要な意義がある。

2）当時、「蹶張弩」を引き、装填する際、立って行う方法と座って行う方法の二種類があった。歩射のなかに立つ姿勢もあれば、しゃがむ姿勢もあり、また立つ姿勢の中に、正面から発射する姿勢もあれば、後屈立ちの姿勢もあった。

3）歩兵が鐶柄長刀を使用する方法には二つあった。一つは片手で鐶柄長刀を持ち攻防を行ないつつ、もう一方の手は刀をもった手の動きにあわせるというものであり、もう一つのやり方は、片手で鐶柄長刀、もう一方の手で盾を持ちながら、両手の動きを合わせて攻防を行なうというものであった。注目に値するのは、鐶柄長刀は、片手で持つだけではなく、両手で柄を握って使用することもあったという点である。漢以前及び漢の歴史文献には両手で刀を使う史料が見られないが、この画像石は、中国において両手で刀を用いる刀法の歴史が長く存在したことを示している。

4）漢代、長兵器としては戟と矛が重用されたが、とりわけ戟が多く用いられた。

5）手搏の技能の中に、徒手の対戦もあれば、徒手と兵器の対戦もある。特に、後者即ち「空手で白刃に入る」技能は、手搏の重要な技能として重視されていた。

6）各地の豪族の荘園に兵蘭が設置される例が多く見られる。このことは荘園による武術訓練が一般化していたことを反映している。

7）漢代の両手で鐶柄長刀を使用する方法と関連刀勢は早くから日本刀術に取り入れられていたと考えられる。また、漢代の「四枝刀」、その形状は基本的に日本の「七枝刀」と同工であり、七枝刀の初型（原始型）ではないかと推測される。このように古代日本における武器には中国大陸の武器の要素が寄与するところが非常に大きかったのである。

【キーワード】
画像石　画像磚　武術　弩　戟　矛　鐶柄長刀　手搏　兵蘭